

[column]

## 小規模校を初めて訪れて

—さはら小学校見学の感想—

于 森 (研究生)

私は今回、初めて大子町での学習支援活動に参加した。一日目は、さはら小学校で行われた「親子ふれあいの集い」、二日目は「佐原地区産業文化祭」の活動に参加した。

一日目に、さはら小学校の児童とその親、そして教職員と餅つきをして、共に食事をした。「親子ふれあいの集い」が終わってから、その小学校の親たちに20分程度のインタビューをした。そして、6年生の子どもたちと一緒に校内にある「のびっ子園」で白菜を収穫したり、体育館でドッジボールをしたりした。

私は、さはら小学校のような小規模校を初めて訪問した。実は、私はこういうオープンスペースの教室を見たとき、びっくりした。私が子どもだったら、こんなふうに自宅のようなアッ

トホームな学校で勉強できたら楽しいかもしれない。お互い家族のように暮らしているように感じたが、授業を受けるとき、クラスの間で邪魔にならないか気になった。

一日目の活動を通して、地域と学校の結びつきの深さを感じた。小規模校なので、地域が支援をしなければならないとPTAの方が言った。そういった責任感を持ちながら、心から、さはら小学校に関心を持っているのだろうと感じた。親たちは、毎日、さはら小学校のウェブサイトを見ることが楽しみだと言っていたからである。もしも私の母校にもウェブサイトがあったら、こんなふうに両親から関心をもってもらえることは嬉しいだろうと思う。

私は、さはら小学校で子どもたちと餅つきをして、「のびっ子園」で収穫を手伝いながら小規模校の特色を生かした学び合い、競い合う場がつけられていると感じた。また、体験学習に基づく個人どうしのかかわりを通した内面の深化が大切にされていることを身をもって体験した。

今年度、さはら小学校の在学児童数は52人で

あり、昨年より2人減った。来年度はさらに少なくなるかもしれないと、小学校の先生から伺った。その先生の話によれば、大子町の若者たちは、ふるさとを離れる人が多く、東京のような大都市に就職したり定住したりしている。

全国的な少子高齢化の傾向のなかで、さはら小学校のような小規模校の取り組みは、注目すべきものだと思う。さはら小学校で行っている独自の活動は、少子高齢化の進んでいる地域ならではの活動であると考えている。さはら小学校では、家庭と学校の温かいつながり強く感じた。今後も大子町を訪れてまた子どもたちと触れ合いたい。

## 記憶にある母校と先生への思い

### 一大子町の小規模校を訪れて一

曹 蓓蓓（博士前期課程1年）

日本へ来るずっと前から、日本の社会では、少子化と高齢化が進んでいると聞いていた。具体的には想像できなかった。その理由は、私の小学生のときの学校数と在校児童数を見ていただきたい（表1）<sup>1)</sup>。

黒沢小学校を見学して、一つの教室の中に二つ学級の学年の児童たちがいたことに驚いた。これは、中国人の私にとっては全く考えられなかったことである。黒沢小学校の全校児童は40名（平成23年4月1日現在）<sup>2)</sup>、隣接するさはら小学校の全校児童は52名（平成23年4月現在）<sup>3)</sup>。これらは、私の小学校の時代の一クラスに相当する児童数であった。もし二つの学級が一つの教室に設置されたら、きっと大きな教室、あるいは階段教室でなければならないだろう。都市の少子化や高齢化はともかく、過疎地での少子

化や高齢化のため、生活上や教育上での問題はもっと深刻になろう。しかし、児童数が減少しつつある一方で、学校の施設は全部揃っている。教室から校庭まで、ところどころ学習の場だけでなく、生活の場の雰囲気味わえる。それに比べると、私の記憶のなかの学校は、ただ学習の場だけで、生活にかかわる力の育成は主に家のなかで親が担っていたと思う。

このような中国の学校は、学問を追究してばかりいて、先生への尊敬度も非常に高かった。児童・生徒は、親の話を聞かなくても先生の言ったことを絶対に信じ込んで、徹底的に実施していた。いたずら好きな子や不良な子は勿論いたが、先生の指摘や怒りには素直に（せめて表面的に）受け取っていた。先生に暴力を振るうことなんて全くなかった。もう一つの理由は親であった。私の小中学校は父の母校であり、私の担任も昔は父の担任であった。父が学校に行って私の担任と会うたびに、その先生に尊重の気持ちを持って接した。その尊敬は、骨から湧いてきたように私は感じた。社会に出て、いくら偉い人間になったとはいえ、親たちは、自分の昔の先生の前では何もわからない教え子に戻ったようだった。そのため、私たちも先生を自然に尊重してきた。これは私の経験した教師、対、児童・生徒の関係であった。しかし、見学の日本の小学校は生活の場のような雰囲気もあった。先生と児童は家族のように付き合っているように見えた。児童たちは家族の年輩の人たちに話すように、気楽に教師と交流していた。距離感があまりないように思われた。それは魅力的なところだと思っている反面、先生に対する尊敬度はどうなのだろうか。先生に暴力を振るうこともある。日本の先生の多忙さは有名であるが、その多忙さの結果、生徒が先生への不信感を生み出した原因はどこにあるのだろうか。

表1 1988年中国全土及び上海における小学校数と在校児童数

範囲	学校数	学校数	在校児童数（万人）	一校あたりの児童数（人/校）
全国		793,261	12,535.78	約 1,580
上海		2,839	99.37	約 3,500

（筆者作成）

現在、中国の上海では、教師と生徒の関係もだんだん変わっている。教育の産業化にもなつて、先生の仕事もサービス業になったと感じた。親たちは先生に対して、そんなに尊敬する気持ちを持っていない、かえって自分の子どもの要求を合理的にも非合理的にも満足させるべきだと思っている。子どもはその姿を見て、自然に見習ってしまった。教師の尊敬度が低くなる一つの原因は、親にあるのではないかと考える。

## 中国吉林省の山間地域の小学校

### 一黒沢小学校の見学を通して一

李 仙（博士前期課程1年）

私にとって、大子町に来るのは初めてで、日本の山間地域を訪れるのも初めてであった。自然に恵まれて、静かで、環境がいい町で、故郷に戻ったような気がした。初めに訪ねたのは黒沢小学校である。学校の後ろは山で周りには住宅と畑である。私が通っていた小学校と似ていた。

私が住んでいた中国吉林省汪清県仲坪村という所は山と川に囲まれた自然環境がいい場所で、面積約30平方キロメートル、人口590人の山間地域である。人口減少に伴って1998年に5つの学校が合併して民族学校から混合学校になる<sup>4)</sup>、転校や少子化、教師の転勤等の様々な問題で2000年からはその小学校も他の地域の4つの小学校と合併して現在は校舎しか残っていない状態である。

自分の小学校の経験<sup>5)</sup>に基づいて日本の黒沢小学校との違う点について以下の5点に分けて述べてみたい。

①日本の小学校を訪ねるたびに、一番驚いたのがロビーで上履きにはき替えることであった。中国の場合では室内でも室外でも同じ靴である。日本の学校の室内は床も木造なのでほこりも起こさなく、子どもたちがきれいな環境で勉強ができ、転んでも怪我はしない。

②日本の小学校においては、教室の壁に、理科観察記録、総合学習コーナー、かかきか

どう等、様々なコーナーに分けて張ってある。中国でも張り紙などはある。しかし、詳しい内容ではなく、今月の行事、褒める場等になっている。また、日本の小学校は学校開放を行っているので保護者は自由に学校に来て、自分の子どものクラスで、自分の子どもがどんな環境で勉強しているか、学校でどんなことをやっているか、壁紙をみたら、一度に分かるようになっている。中国の親たちは特別な事が無いと学校には来ることはない。親が学校を訪ねるのは、子どもが何かを間違えた時に、先生に呼ばされ、謝るためだけであった。

③日本と比べて私が通っていた学校にはないものは、音楽室、室内運動場、養護室である。音楽授業はそのままの教室で、室内運動場は建物が危ないから立ち入りが禁止で、図書室はあったが、紛失事件が多少発生したため、開放されなかった。本が読みたい時は買って読むか、友たちから借りるのがその時の現実だった。

④日本の小学校の校長先生や他の先生との関係が親しく見えた。「私の学生時代でも先生は怖い存在だったが、今の子どもたちは校長先生を近所のおじいさんに考えるよ。冗談も言うし、今の子どもって、だいぶ変わったな。あの時とはね」という黒沢小学校の校長先生のお話を聞いて、共感を得た。私が小学生のころは、校長先生や他の先生との間に壁があるように、近づけない存在であった。小学校の時に先生との思い出とすれば怖かった記憶しか残っていない。大人になった今でも、その時は先生という存在は本当に怖かったと思う。

⑤大子町では若い教員が多く、大子町の教育振興のために力を入れている。私が通っていた小学校でも10年前に大学卒業直後の教員を受け入れ、過疎地の教育を復興する計画を行った。しかし、6年後に失敗した。その背景の一つは、経済発展に伴って出稼ぎのブームになって若い世代が地元を離れたことである。経済的に豊かになったら、親は子どもをもっといい環境で教育を受けさせるために、子どもを都市部に転学させた。そのため、児童数が年々減りつつある。もう一つは、若い教員が卒業したばかりなので、

経験もなく、教員研修会なども少ないから、様々な教育の現場で失敗がある。日本の小学校のように、一人の担任教員がすべての科目を担当するのではなく、中国では、科目別に先生がいるため、児童数と教員数が反比例になるので、学校を運営するのに困難があったと考えられる。

過疎地では学校統廃校が行われているなかで、大子町は地域と学校が一丸となって支え合い、教員は、地域の人や自然など資源を積極的に活用し、学習を組み立てている。地域も学校の活性化のために協力を惜しまない。そのように地域と学校の信頼関係が、児童に安全と誇りを与え、良好な教育環境を作り上げていると考えられる。

全校児童の数が少なくても、地域と支え合って教育活動を実施している点は注目すべき点であり、学ぶべきところだと思う。

## 中国の学校の軍事訓練

陳 菁浩 (博士前期課程1年)

中国の学校生活は日本と比べて相違点がある。中国の学校では、私にとって面白いところが、軍事訓練があることである。日本の学校では軍事訓練がないため、日本人は中国の学校の軍事訓練について始めて聞くとき驚きするかもしれない。しかし、「軍事」とは言っても兵役のようなものではない。学生に集団意識・規律などを身につけさせ、苦勞に耐える習慣を養うことを目標にしている。

「中華人民共和国兵役法」(1984年)の第46条では、「教育部と国防部は普通高等学校及び普通高校の学生の軍事訓練に責任を負う。教育部門と軍事部門は学生軍事訓練の業務機関を設け、専任者を配置し、学生の軍事業務を担当させる」と定められ、中国の学校教育における軍事訓練は法律的に規定された。

1985年5月に「全国学生軍訓試点工作會議」が開催され、會議では当時の教育部長であった何東昌が「学生軍事訓練工作は、兵役法がわれわれに賦与する新しい任務の一つであり、学校

の教育内容のひとつである」<sup>61</sup>と述べた。このように、学生軍事訓練は学校教育の内容の任務であると指摘された。その後、中国では「1984年兵役法にもとづく大学と高級中学の軍事訓練が実験的に開始されたのは1985年9月新学年のことであった。」<sup>71</sup>

学校の中の軍事訓練は軍隊や警察の人を教官として招き、1～2週間、あるいは一ヶ月の期間で、新学年の始まりの時に行う。訓練の内容は中学校或いは高校は基本的に整列や隊列行進の訓練であり、大学では正規の軍事訓練という形になる。例えば、校内のグラウンドで行う場合と兵營で行う場合がある。中学校はそこまでいれないが、学校のグラウンドで「列隊」、「正歩走」、「立正」などを学ぶ。生徒たちは迷彩服を着たり、隊列行進をしたりして、普段と違って格好いい顔を見せる。寮生活の生徒には身の回りのことを整理することも軍事訓練の一部である。例えば、自分の生活用品の置き方と布団のたたみ方などである。筆者にとって、布団を四角にきちんとたたむことがすごく印象に残った。私は高校のとき、1週間で、大学が1ヶ月の軍事訓練を受けた。当時は「きつかった」「もうやりたくない」と思ったが今は振り返ると軍人の生活を体験したように思われる。

学校は軍事訓練を通して、生徒の思想政治意識を高め、国を愛する意識を高めようとしている。学生たちにとっても、軍事訓練は集団意識、困難を克服する意志力を養うことや問題解決の能力を高める機会になっている。

しかし、軍事訓練は学生によりよい効果を与えるだけではなく、軍事訓練の過程では事件や事故の発生がある。例えば、訓練を行っているときは、学生がけかをし、夏の暑さに体調が崩して倒れる学生もいる。

中国の学校の軍事訓練のやり方には問題があると思う。軍事訓練指導側の「厳しすぎ」指導が上記の問題を起こしたのではないかと思う。学校の中で実施している軍事訓練は「軍人」を養成する兵營の生活と違うため、軍事訓練やり方をどのように安全的に実施することは今後の課題である。

## 中国のサマーキャンプ

鄭 姨華 (研究生)

2011年2月、日本青少年研究所<sup>81)</sup>の「高校生の心と体の健康に関する調査」によると、中国の高校生の週に5日以上運動した者は17.8%、日本33.3%、米国26.0%、韓国10.8%であり、4ヶ国中で第3位になっている<sup>91)</sup>。中国の青少年の運動時間が少なくなっている近年、課外活動の一つの形として、サマーキャンプは、親子たちに評判が上々のようだ。

中国の小学校の第一学期は、9月から翌年の1月までである。第二学期は、3月から7月までである。そして、7月から9月までは長い夏休みがある。近年、この長い休みを活用して、安全性に配慮したうえで、学校の暮らしとは全く異なるサマーキャンプの活動に参加させようという親が増加している。サマーキャンプの主催者は、社会団体、教育団体、商業団体などである。主催する団体によって、サマーキャンプの内容や費用は異なる。中国の親子たちは、サマーキャンプの参加にすることを通して、以下のようなことを学んでいるようだ。

まず、勉強である。これは、遊びながら勉強することが重視される。次に、協力精神の養成である。中国の経済は急激に成長しており、また、「一人っ子政策」実施された原因で、多くの家族は一人っ子世帯である。そのため、少子化になっている。それとともに、平日に子どもの集団活動の体験が少なくなっている。サマーキャンプでは、数10名から100名ぐらいの同じ年齢層の子どもたちが一緒に勉強したり、生活したりしながら、お互いに協力とコミュニケーション能力を培養させている。さらに、中国では親が子どもを過保護に育てる「小皇帝」<sup>10)</sup>問題が指摘されている。「小皇帝」に育てられた子どもの自立性と生活習慣・能力は、年々低くなっている。こうした現状を打開するために、親と別れて自分と同じ年齢層の子どもたちと長期にわたって一緒に生活・勉強しながら、困難に立

ち向かう経験を得ている。子どもたちは、サマーキャンプに参加することを通して、自律性、協調性、コミュニケーション能力を培う。特に、都会で生活する子どもたちは、自然体験を通して、地球を愛することを学ぶ。

ところが、最近では、自然体験と体力鍛錬だけでなく、有名な大学を訪問することも、サマーキャンプの重要な計画になっている。国の一流大学に訪問する経験を通して、幼い頃から学問の雰囲気満ちた大学を憧れるようにするというサマーキャンプの活動が、多くの家庭から注目されている。特に近年、経済能力がある家庭では、一人っ子の場合、約30~40万円を使って、子どもをアメリカ、ヨーロッパの名門校に訪問・交流させる「海外短期サマーキャンプ」も人気である。しかし、このように多くのお金を使って、子どもを海外でのサマーキャンプにまで参加させるのは、子どもたちの将来の生活と学習にどのように役立つのか。これは、親と子どもたちが共に考えなければならない問題である。

### 注

<sup>1)</sup> 数字の引用は国家統計局(1989.9)『中国統計年鑑 1989』中国統計出版社、pp.829 表17~41。「各地区小学校市町村分けの学校数及び在校生数」の一部分である。一体、1988年の年頭、年中、年末のどの時期を期限として統計したのか、表のなかに説明はなかった。

<sup>2)</sup> 黒沢小学校ホームページのURL

(<http://www.daigo.ed.jp/kurosawa-syo/syokai/>)

<sup>3)</sup> さはら小学校ホームページのURL

(<http://www.daigo.ed.jp/sahara-syo/syokai/>)

<sup>4)</sup> 朝鮮族のみが通っている民族学校と5つの地域の学校とが合併して「混合学校」になる。「混合学校」では、漢族と朝鮮族が一つの学校に所属するが、クラスと教師は異なる。

<sup>5)</sup> 筆者の経験は筆者が小学校の頃で、1990年代の経験である。現在の状況とはたいぶ異なる部分もあると思われる。

<sup>6)</sup> 同上。

<sup>7)</sup> 世良正浩「中国の大学と学生軍事訓練(上) —1920年代から1990年代初頭の教育制度的研究—」『明治学院論叢』明治学院大学文学会、平成9年、p.20。

<sup>8)</sup> 「日本青少年研究所」の事業内容は、国内外の青少年の意識や行動など、広く青少年に関する調査を行うことである。

<sup>9)</sup> 「日本青少年研究所」のウェブページ

(<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/>) 2012年3月25日最終閲覧。

<sup>10)</sup> 中華人民共和国の「一人っ子政策」によって、富裕層や中産階層家庭で過保護に育てられた子どもを「小皇帝」と呼ぶことがある。